

# 新潟教育研究所

平成28年12月15日発行 第33号

公益財団法人 新潟教育会  
新潟教育研究所

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町590-3 新潟教育会館

TEL・FAX 025-222-2971  
E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

## 未踏の時代に 求められるもの

新潟教育会 代表理事

川端弘実



平成25年に閣議決定された「第2期教育振興計画」で【我が国を取り巻く危機的状況】が指摘され、今後の社会の方向性として「自立・協働・創造」の三つの理念の実現に向けた生涯学習社会の構築が明示された。前後して3年半の間に教育再生実行会議から9次に渡る提言がなされるとともに、提言のフォローアップ会合が設けられ、教育改革が加速度的に実行されてきている。

さて、【我が国を取り巻く危機的状況】とは、超少子高齢化による人口減少社会の到来や、AI（人工知能）等の科学技術の進展による職業環境の劇的変化など、将来の変化を予測することが困難な時代の到来を想定している。その時代を第7次提言では、これからの時代・新しい時代に加え、「未踏の時代」と表現している。

一方で、非正規雇用が40%を超えたり、大学新卒者の就職3年後の離職率が30%を超えたり、また、不登校の長期化等で引きこもりや未就職者が増加するなど、「この危機的状況の中で、子供たちにどのような力を育む必要があるのか？」を真正面から考えざるを得ない。

そんな状況の中、今年度中に次期学習指導要領が告示される。未踏の時代に必要となる資質能力を育むために、従来の「何を学ぶか。」に加え、学校裁量に任されていた「どのように学ぶか。」「何ができるようになるか。」を明示し、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り

手として必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目標としている。そして、各教科等で育成すべき資質能力も、「生きて働く」知識・技能、「未来の状況にも対応できる」思考力・判断力・表現力等、「学びを人生や社会に生かそうとする」学びに向かう力・人間性等と表現され、未来の創り手として、未踏の時代を切り拓く確かな力を育むことを目標としている。

学校教育や子供たちに、このような負担や過重を負わせていいのだろうか？、とかく「今の若者たちは…」との発言も聞こえてくる。

しかしながら、新潟日報の輿論（10.29）でNHKの大越健介さんは、最近の若者たちを「静かな改革者」と表現している。東日本大震災や熊本地震等での若者たちの姿を「無償の活動にそれぞれの……人生を投影させ、新たな挑戦に踏み出す人たち、プライスレスな行為のために自分を磨き、人と人とのつながりの拠点になろうとする真摯な姿に私は打たれる。」と述べている。私も、日々教職希望の大学生と触れながら、同じ印象を抱いている。私たちが熱い想いで懸命に取り組んできた学校教育は、確実に成果をあげている現状もある。

高い志をもち、現実に対応し、必要な情報を集め、判断し解決策を考える。そして、多様な人と協力して困難を乗り越えていける「自立・協働・創造」の力を備えた人材を育てるために、学校教育をよりよく変革していく必要がある。このことを教育改革の流れの中で確認・共有したい。



# 技術科現職教員として思う

新潟教育研究所 教育アドバイザー

目黒 進



## はじめに

技術・家庭科，特に技術系の教師には問題が山積している。誤解を恐れずに，あえて言わせてもらえば，その原因の一つは教員の指導力の低下であり，もう一つは指導内容の量と，そのレベルであろう。

ここでは，能力不足かもしれないが，この2つの問題について私見を述べてみたい。

### 1 教員としての指導力

「かんながけ，半田づけ，タイピング，アプリケーションソフトの使い方といった，個別の道具等の操作技能の習熟に，過度の学習時間を費やす事例が見られる」  
(※1)

ものづくりへのこだわりと緻密さは大切だ。そして，この問題の根底には，授業時数不足の他に，教員の技術力（いわゆる技能を含む）不足がある。

技術力の不足は，学習全体を見渡した指導内容のバランスを欠き，日々の授業が学習時間を消化するための授業になっていきやすい。

モノが作れない技術科教員が増えてきている。モノは作れなくても授業ができるというのでは画餅である。「できてなんぼ」が技術である。自分が身に付けてきた以上のものを，生徒に伝えることはできない。

たとえば「運動ができない体育教師」「楽器が演奏できない音楽教師」「絵が描けない美術教師」はいるだろうか。もしいたとして，そういう教員を，生徒は「学びの師」として認めるだろうか。

作るものは何でもいい。生徒と同じ教材を毎年1つずつ作ってみれば，毎回，新しい発見（新しい学び）があるものだ。また，専門書を読んでみるのもいい。園芸関係の専門書（たとえばバラの育て方）などもお勧めである

「豊かな経験と豊富な知識」。この2つが専門としての誇りと指導を支える。技術科教員として，実践的な技術力の向上を目指してほしい。

### 2 学習内容

「技術の発達を主体的に支え，技術革新を牽引することができるよう，技術を評価，選択，管理・運用，改良，応用することによってよりよい生活や持続可能な社会を構築する資質・能力の育成をより一層重視することが求められる。」  
(※2)

今回の学習指導要領の改訂でも，技術リテラシーの重要性が強調されている。ただでさえ少ない学習時間の中で製作活動を行い，技術への体験的な理解を深める等，学習指導要領で示された内容を指導することは困難を極める。いや，困難というより絶望的でさえある。

そこで，少し考えてみよう。学習指導要領は社会の要請と時代の変化に合わせて，改訂が行われてきたと考えられる。つまり，大きな流れがあって，その本質は変わらないのではないか。

だから，まず教員自身が改訂の方向と内容をよく理解し，自分のものにしていくことが重要である。そうすることによって，少ない時間の中で学習させていくべきこと＝指導していくことへの軽重が生まれ，必然的に指導（学習）内容の優先順位が出来上がってくる。それこそが「何を，どこまで，どのように教えるか」ということにつながっていく。

### おわりに

いつまでたっても自分の授業は至らないと痛感する。いや，以前よりダメになっているのではないかと不安に感じることも少なくない。様々なジレンマを感じつつも，日々の授業実践をしていくことが，現場教員の宿命である。

※1：全日中技・家研調査・報告（H24～H26）

※2：文科省教育課程部会報告（技・家部会H28.8.26）

# 学年(学校)はなぜ4月から始まるのか (その2)

新潟教育研究所 研究員

熊倉忠夫



## 小学校の学年始まりのようす～明治24年～

明治22年(1889)から、各府県の尋常師範学校が4月学年制を採用したことは前号で述べた。2年後の全国の小学校の学年始期を見てみよう。

明治24年11月現在 文部省調査

学年始期	府県数
1月8日	1
4月1日	29 *新潟県が該当 「明治19年就学規則による」
5月1日	1
8月21日	2
9月1日	5
11日	1
11月1日	1
未詳	7

何と多様なことであろうか。師範学校にならった4月1日年度開始は約6割である。

しかし、明治23年(1890)第2次小学校令が制定されると、文部省は本令の全面実施の時期に合わせ、明治25年(1892)2月、学年始期を4月1日に統一せよと府県に指示した。学級制へと変わったたりなどした第2次小学校令は、学校教育における一つの転換点であると言えよう。

## 小学校・師範学校の学期～3学期制となる～

1年間が決まり、学期も決まり、統一された。

- ① 師範学校 4月開始で3学期制  
明治30年(1897)7月規則改正  
1学期 4月1日～8月31日  
2学期 9月1日～12月31日  
3学期 1月1日～3月31日
- ② 小学校

明治33年(1900)に第3次小学校令が制定され、小学校の4月始期が施行規則に明文化された。学期は府県知事の定めによるとしているが、師範学校(並びに附属校)にならって3学期制を採用する府県がほぼ全部であった。

ちなみに、新潟市では2005年(平成17)から学校独自で2学期制を採用してもよいことになったから、100年以上3学期制が続いたことになる。

## 中学校と高等教育との接続が問題に

前号で中学校が9月開始と述べたが、このころは小学校に合わせ4月開始となっていた。すると、中学校の卒業は3月であり、高等学校(第一高等学校など)は9月入学であるから、約半年間空白ができる。これが本来の意味での教育界における「浪人」である。困った事態である。

- ① 大正7年(1918)12月  
大学令、高等学校令が制定される。  
高等学校令施行規則「学年ハ四月一日ヨリ翌年三月三十一日マテトス」
- ② 大正9年(1920)  
東京大学学則改正「学年ハ四月一日ニ始まり翌年三月三十一日ニ終ル」  
翌大正10年(1921)から実施された。  
高等学校も大学も9月始期に固執できなくなり、約30年後、4月開始になったのである。

## 4月始まりをどう考えるか～一考に値する～

- ① 夏休みの問題…学年の途中か学年暦の終了後か。学習の継続性(宿題)がいつも問題になる。4月開始は、教師の新学年(新年度)への準備が課題になる。夏休み後であれば…
- ② 国際化への対応…留学生の受け入れ、海外への留学時期が問題となっている。大学が切実である。東大は四学期制をとっているようだ。
- ③ 新卒者の就職期…一般社会は4月始まり。
- ④ 感性…桜花爛漫の季節での入学式、新年度の開始にふさわしい。しかし、桜の咲かない地域もある。

《参考文献》 佐藤秀夫著『教育の文化史』2



# 第8回教師力アップ講座

期日 平成28年7月24日(日)  
会場 新潟教育会館

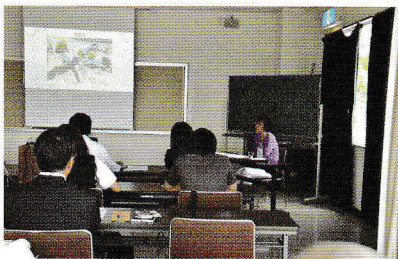
## 第1講座

### 早期療育の必要性について

～保育園と療育教室の連携及び小学校入学時の連携～

講師 エンジェル保育園園長

鈴木成実様



豊富な画像を使いながら保育園のダイナミックな活動や療育の様子についてのお話してくだ

さいました。子どもたちの元気いっばいの笑顔がたくさん見られました。でもそれは一朝一夕に現出できたものではありません。朝食の指導から始まっています。「よく食べ、よく遊び、よく歩き」が園のモットーということです。

遠くまで本物を求めて歩き、給食が詰められた弁当を食べます。お腹が空いているので当然完食です。

「卒園式は子どもがつくる」にはびっくり。子どもってすごいなと思われました。

気になる子についての指導～療育～についても、実例に基づきながらお話くださいました。子どもの実際の様子を画像で親御さんに見せ、説得して療育指導を受けさせるということでした。子どもが変化していく様子が分かり感動的でした。

参加者が少なく勿体ないと思いました。幼児教育の中身を知る大変いい機会でした。

## 第2講座

### アクティブ・ラーニングにどう取り組むか

～“わくわくする学び”を目指して～

講師 新潟青陵大学教授

岩崎保之様



講座2コマ分を使い講義・演習を交互に行いながら充実した研修が行われました。

アクティブ・ラーニングは間違いなくこれから主流になる学習方法です。本物のアクティブ・ラーニングをつかみ取る絶好の機会でした。

### <受講者の感想>

◆とてもよかったです。アクティブ・ラーニング、ファシリテーションがとてもよくわかった。現場ではちがった受け止めがたくさんあるように思った。



実践も紹介していただいたので、今後勤務校で実践していきたい。職員会議等にも生かしたい。

◆対話になかなかならない、グループの話し合いの収束の仕方はどうしたらいいのか等悩みがありました。本講座でたくさんのヒントをいただきました。

## 教育アドバイザーリストの活用を

9月10日に教育アドバイザー説明会を開きました。平成28年度登録の新規教育アドバイザーは14人です。総勢89人となりました。

新たに「平成28年度版教育アドバイザーリスト」を作成し、県内の市町村教育委員会と県内の小中学校に送付しました。御活用をお願いします。

## 所員の交代について

このたび、所員の交代がありましたのでお知らせします。

<退任> 森 肇 平成19年～28年6月 在任

<新任> 樋口光栄 平成28年7月～

よろしくお願ひ申し上げます。